

新撰太閤記

信州上田の防戦は日本の
のちで當時飛騨も
徳川の火車之を責むる
直田の書圖に當りて
秀吉城中使し辨の下
明々和整と秀吉の智

上田城
歴史年表



宛山小助

海野六郎

甚良宮守

腹云タツ

上田城歴史年表

上田市教育委員会

目 次

上田城の歴史	1
上田城略年表	7
上田城歴代城主	14
真田氏ゆかりの史跡分布図	15

上田城の歴史

(1) 真田氏による築城と慶長の破却

上田城は天正11年(1583)に真田昌幸によって築城が開始されました。真田一族は上田市真田地域を本拠とする土豪でしたが、昌幸の父・幸隆が武田信玄に従い、「信州先方衆」の旗頭として頭角を現し、信濃、北上州を転戦しました。昌幸は幸隆の三男で、幼い頃から甲州で信玄に仕え、武田氏ゆかりの武藤姓を名乗っていましたが、天正3年の長篠合戦で兄・信綱、昌輝がともに討死したため、信濃へ戻って真田家を継ぐことになりました。



天正10年、武田氏は織田信長によって滅ぼされ、その信長もわずか3ヶ月後の本能寺の変で命を落としました。この動乱期に昌幸は巧みな外交戦術で生き残りを図りながらも小県郡の制圧に乗り出し、築城と町づくりを開始しました。上田城は従来 of 山城と異なり、領国統治に便利な平城でしたが、南は尼ヶ淵の断崖に面し、北と西は矢出沢川に外堀の役目を果たさせるなど、天然の要害も兼ね備えていました。

築城開始から2年後の天正13年、上州沼田の領有をめぐる紛争から上田城は徳川家康の攻撃を受けますが、これを撃退して真田と上田城の名は一躍有名となりました。昌幸は以後、上杉景勝、豊臣秀吉に臣従し、領国と城の整備に努めました。

慶長5年(1600)に起きた関ヶ原合戦では、昌幸と次男信繁(幸村)親子は石田三成方に、長男の信之は徳川家康方に属することとし、昌幸は中山道を西上する徳川秀忠の大軍を相手に上田城で籠城戦を行いました。秀忠は上田に数日間釘付けにされ、関ヶ原合戦に間に合わなかったことは有名なエピソードです。

しかし、昌幸の健闘もむなしく合戦は徳川方が勝利し、上田城は徳川配下の諸将によって破壊され、廃城同然で信之に引き渡されました。信之は城の修復は行わず、三の丸に屋敷を構えて藩政にあたりましたが、元和8年(1622)、松代藩(長野市)に移封を命じられました。真田氏の上田在城期間は39年間でした。

真田氏時代の上田城については、史料が乏しく不明な点が多いのですが、梯郭式の曲輪や、本丸、二の丸の北東部に鬼門除けとみられる切り欠きを設ける点など、縄張りの基本的な部分は仙石氏以降の上田城にも踏襲されていると推定されています。建造物については工事や発掘調査で出土した瓦によって、本丸はもちろん二の丸や西側の小泉曲輪等にも瓦葺きの建造物が建てられていた可能性があります。特に金箔を押しした鯨瓦しやち、鬼瓦とりぶすま、鳥衾瓦や、伏見城、大坂城に起源のある菊花紋軒丸瓦、五七桐紋鬼瓦の出土は、真田氏時代の上田城が石川数正の松本城、仙石秀久の小諸城などとともに秀吉配下の城郭として整備されたことを示しています。

(2) 仙石忠政による復興

仙石氏は美濃の土豪で、秀久の代に織田信長に仕え、信長の旗印であった永楽通宝紋を家紋としました。織田家にあっては羽柴秀吉配下として活躍し、信長没後の天正11年には淡路国州本城主となり、同13年には讃岐国さぬきを領有するに至りました。ところが、翌14年の島津氏との合戦に際して、秀吉の命に背いて敗戦し、所領を没収されて放逐されました。しかし、天正18年の秀吉の小田原攻めの折、秀久は家臣とともに参戦し、その戦功により先の罪を許され、信州佐久郡を与えられ、小諸城主となりました。秀久は小諸城を整備し、慶長5年の上田城攻撃と合戦後の破却にも加わっています。また、伏見城内において大盗賊石川五右衛門を捕らえたという伝説も知ら



仙石氏家紋
永楽通宝紋

れており、その賞として秀吉より拝領した名器「千鳥の香炉」は明治5年に皇室に献納されました。

元和8年(1622)に小諸から入封した仙石忠政は、廃城同然となっていた上田城の復興を計画し、幕府の許可を得て寛永3年(1626)に工事に着手しました。忠政は築城奉行を勤めた家臣原五郎右衛門に宛てた直筆の覚書の中で、城普請の細部に至るまで細かく指示を与え全権を委ねています。工事は2年後の寛永5年に忠政が病床に臥すまで続けられ、その後、忠政の病死と重臣の抗争などの事情から未完成に終わっています。

現在見ることができる上田城の姿は、ほとんどがこの時に築かれたもので、本丸は7棟の重層隅櫓と土塀、東西虎口こぐちに2棟の櫓門などが完成したものの、二の丸、三の丸は堀、土塁、虎口石垣などの普請(土木工事)が完成しただけで、櫓や門を建てる作事(建築工事)は手付かずに終わりました。しかし、発掘調査の結果、二の丸の虎口にも櫓門の礎石が確認され、忠政は二の丸にも建物を建てる予定だったことが窺われます。

仙石氏時代の上田城は、寛永18年、貞享3年(1686)、元禄15年(1702)の3回にわたり改修工事が行われた記録が確認されており、破損した石垣えんしやうの修復、二の丸北虎口土橋の木桶を石桶に改修、二の丸南西部に煙硝蔵を建設、本丸侍番所の建て直しなどが実施されました。仙石氏は忠政以降、政俊、政明と三代84年間にわたって上田を治め、塩田平の溜池の築造・改修などによる農業振興と上田綿(紬)などの産業育成に力を注ぎました。

(3) 松平氏在城時代

宝永3年(1706)、出石藩(兵庫県豊岡市)に移封ただちかとなった仙石氏に代わって、出石から松平忠周が入封しました。この松平氏は三河以来の徳川氏の一族で、藤



井松平氏と呼ばれます。藤井松平氏の祖、信一は織田信長の近江国みのつくり箕作城攻撃に家康の名代として徳川軍を率いて奮戦し、その武勲により、織田信長から自身が着用していた革羽織（重要文化財小文地桐紋付韋胴服・上田市立博物館蔵）を拝領しました。以後、藤井松平氏はこの胴服に用いられていた五三桐紋を家紋としました。

松平氏は、明治維新に至るまで七代、160年余にわたって上田藩を治め、譜代大名として幕府の要職をたびたび務めています。特に六代忠優(忠固)はペリー来航に始まる幕末の動乱期に二度老中になり、多難な国政にあたった人物です。松平氏時代は経済の発達や産業の振興にともない、上田独自の文化が育まれ、幾多の人材を輩出しましたが、宝暦騒動に代表される一揆も多発しました。

上田城については、享保17年(1732)に起きた千曲川の大洪水で、崩壊の危機に瀕したひん尼ヶ淵の崖面に護岸用石垣を築いた以外は大規模な改修は行われず、仙石氏時代の姿が幕末まで維持されたようです。幕府の許可を仰いだ石垣等の修復工事は享保18～21(元文元)年(1733～36)、寛延3年(1750)、宝暦7年(1757)、天明8年(1788)、天保14年(1843)、弘化5年(1848)、安政3年(1856)、万延元年(1860)の8回が記録に残っていますが、隅櫓に使用されていた瓦の刻印により、元文元年、天明元年(1781)、天明3年、文政13年(1830)等にも屋根の補修が行われていたことが窺えます。

(4) 明治以降の上田城

明治4年(1871)の廃藩置県に伴い、上田城は国(兵部省)に接收され、東京鎮台第二分営が置かれました。第二分営は旧藩主邸に本部を置き、上田城には調練場と火薬庫が設けられました。しかし、明治6年には第二分営が廃止され、明治7年に本丸、二の丸の土地、建造物、樹木などの一切が民間に払い下げられることとなりました。建造物や石垣は次第に取り壊され、西櫓1棟を除いた全ての建造物

と石垣の一部は解体され、桑畑などに変貌していきました。

明治12年、城の面影が失われていくのを惜しんだ松平家旧臣や住民から松平神社創建の動きがあり、その趣旨に賛同した常盤城村在住の丸山平八郎直義は、所有していた本丸の土地を神社用地として寄付し、松平氏の祖霊を祀った松平神社が創建されました。丸山氏は後に本丸上段と堀の一部も神社附属の遊園地用地などとして寄付し、唯一残された西櫓についても旧藩主松平忠礼に献納しています。これにより上田城跡の中核部分は市街化などの破壊から免れ、現代に遺されることになりました。なお、松平神社は太平洋戦争後、真田氏と仙石氏の歴代藩主等を合祀して上田神社となり、さらに真田神社と改称して現在に至っています。

また、二の丸跡は刑務所や伝染病院、桑畑などとして利用されましたが、大正時代に公園化の要望が高まり、土地の公有化、刑務所等の移転、体育・遊戯施設等の建設が行われ、昭和初期に上田城址公園として市民に開放されました。一方で昭和9年12月28日には、本丸、二の丸の大部分が国(文部省)の史跡に指定されています。

昭和16年(1941)、市内で遊郭として使われていたかつての本丸隅櫓2棟が東京の料亭に転売され、これを知った市民の間から2櫓を買い戻し、城跡に移築復元しようという保存運動が起こりました。当時の上田市長浅井敬吾を会長として上田城址保存会が結成され、市民の寄付金により二つの櫓は買い戻されました。移築復元工事は太平洋戦争さなかの昭和18年から始められ、戦局悪化による中断をはさんで、戦後の混乱まもない昭和24年に、現在の南櫓、北櫓として完成をみました。この二つの櫓と寛永期から現存する西櫓は、昭和34年(1959)に長野県宝に指定され、昭和42年と56～61年の2回にわたって保存修理工事が行われ、かつての姿をよみがえらせました。

大正末期から昭和40年代にかけての上田城跡は、市街地に隣接した中核公園として各種の体育、文化施設や顕彰碑が建設され、催

し物や市民の憩いの場として親しまれました。また、昭和2年から47年にかけて、現在「けや木並木遊歩道」になっている二の丸堀跡には、上田と真田を結ぶ電車が通っていました。このように建造物はともかく、城跡自体が文化財だという認識が希薄だったために、総合的な整備計画を策定しないまま、都市公園として施設建設や整備が進められた結果、城跡の遺構と歴史的景観が損なわれ、史跡としての価値を低下させる結果を招きました。

上田市はこれらの反省点を踏まえ、上田城跡を国民共有の文化財として後世に長く継承し、史跡としてふさわしい姿に整備していくために、昭和63年度に「上田城跡公園整備計画研究委員会」を組織し、文化庁と長野県教育委員会の指導、助言のもとに、専門の研究者らを招聘して研究を重ね、その答申をもとに『史跡上田城跡整備基本計画(以下、整備基本計画)』を平成2年度に策定しました。

整備基本計画では、上田城跡の整備を短期、中期、長期の3段階に分けて段階的に実施していくこととし、城跡に相応しくない施設の城外移転、計画的な発掘調査の実施、発掘結果と正確な史資料に基づく遺構の復元整備、城構えを踏まえた史跡範囲の拡大等を基本的な目標として定めています。平成3年以降、整備基本計画に沿って、発掘調査と整備事業が実施され、本丸東虎口櫓門の復元整備や二の丸北虎口石垣の復元整備等を行い、尼ヶ淵に面した石垣や崖面の修復工事を実施してきました。

平成23年度には、新たに「史跡上田城跡保存管理計画」を策定するとともに、「史跡上田城跡整備基本計画」を改訂しました。平成26年にはサントミュージゼの開館に伴い、市民会館と山本鼎記念館が閉館し、今後武者溜りや三十間堀の復元整備が行われる予定です。平成27年には市営プール、ちびっこプール、勤労青少年ホーム等が撤去され、堀などの遺構を表示した多目的広場等として整備が進められています。

上田城略年表

- 天正 3年 (1575) 長兄・次兄の戦死により、昌幸が真田家を継ぐ。
- 10年 (1582) 武田家滅亡。本能寺の変。天正壬午の乱起こる。
- 11年 (1583) 昌幸、徳川氏の力を借りて上田城の築城に着手。
- 12年 (1584) 徳川家康が昌幸に上州沼田城を北条氏に明け渡すように命ずるも、昌幸は拒絶。
- 13年 (1585) 昌幸、上杉景勝に臣属。徳川軍が上田城を攻める(第一次上田合戦)。上田城が一応の完成をみる。
- 14年 (1586) 昌幸、この頃に豊臣秀吉に臣属。昌幸の城下町整備に関する最古の文書(願行寺文書)が残る。
- 18年 (1590) 秀吉による天下統一。信濃に配下の諸大名が配置され、築城普請が開始される。上田城も大規模な整備を行ったものと推定される。
- 文禄 4年 (1595) 秀吉朱印状に「上田 さな田安房守居城」とあり、これが城郭名及び町名としての「上田」の初出。
- 慶長 5年 (1600) 関ヶ原合戦に際し、昌幸・信繁(幸村)父子上田城に籠城、徳川秀忠軍を退ける(第二次上田合戦)。合戦後、家康の命により諏訪頼水、依田信守、大井政成ら上田城番として入り、上田城の堀を埋め、塀を破壊。
昌幸・幸村は高野山に配流。上田領は徳川方についた長子信幸(信之)に与えられた(6万5千石)。
- 6年 (1601) この年の前半頃までに、徳川軍により上田城が破却される。城の破却後、信之に上田領が引き渡され、8月に領内の土地の宛行等を行った。信之は城を復興せず、三の丸に居館を構え藩政にあたった。
- 8年 (1603) 家康が征夷大將軍となり、江戸幕府を開く。
- 16年 (1611) 昌幸、高野山麓九度山で没する。享年65。
- 19年 (1614) 信繁、九度山を脱して大坂城に入る。大坂冬の陣。

- 元和 元年 (1615) 大坂夏の陣で信繁戦死。享年49。
一国一城令、武家諸法度により、城郭の新規構築は厳禁、
修補も許可制となる。
- 8年 (1622) 信之、松代に転封。仙石忠政が小諸から入封。
- 寛永 3年 (1626) 忠政、上田城復興工事に着手。
- 5年 (1628) 忠政没する。これにより城普請は中断。上田城復興工事は
未完成のまま終了。
- 8年 (1631) 千曲川大洪水となり、尼ヶ淵の地形が変わり、水が涸れる。
- 18年 (1641) 城内各所の石垣の修復が許可される。以降、小規模の石垣
修復がたびたび行われた。
- 正保 4年 (1647) 上田城絵図(いわゆる正保絵図)、信濃国絵図とともに幕府
に提出される。
- 貞享 3年 (1686) 本丸内の大破した侍番所を建てなおす。煙硝蔵(穴蔵)を二
の丸西南隅に新設し、櫓に保管していた煙硝(火薬)を移
す。二の丸北虎口土橋の内水道・両脇の石垣修復工事。
- 元禄 15年 (1702) 煙硝蔵を穴蔵から土蔵に変え、二の丸北虎口土橋下の木樋
を石樋(現存)に変える。
- 宝永 3年 (1706) 仙石政明、但馬国出石(豊岡市)に転封。交代で出石から松
平忠周が上田へ入封。
- 享保 15年 (1730) 三の丸藩主屋形が焼失。
- 17年 (1732) 千曲川の洪水により、尼ヶ淵の崖下が大きく崩壊。
- 18年 (1733) 前年の洪水で破損した崖面の修復に合わせて、その前面に
護岸用の石垣を築造(同21年に完成)。
- 延享 元年 (1744) 「小泉^{くるわ}曲輪茶屋絵図」を作成。
- 天明 8年 (1788) 二の丸に新規に土蔵(4棟?)築造。【博物館・同別館付近】
- 寛政 元年 (1789) 三の丸藩主屋形全焼。翌年普請なる。
- 文化 13年 (1816) 三の丸大手堀の堀浚いが行われる。【商工会議所付近】

- 天保 14年 (1843) 二の丸に柵蔵として、土蔵2棟を増築。【博物館・同別館付近】
- 弘化 4年 (1847) 善光寺大地震で櫓が傾き、二の丸三十間掘が水涵れ。「新堰堀廻し用水引渡しの図」を作成。
- 嘉永 元年 (1848) 前年の善光寺地震で崩れた石垣と傾いた櫓 (2棟、具体的な位置は不明)を修復。
- 安政 元年 (1854) 小泉曲輪に調練場を設置し、洋式操練稽古を開始。
安政の東海地震。本丸西門脇の石垣崩壊、塀、櫓門などが傾く。
- 慶応 3年 (1867) 大政奉還 王政復古の大号令。
- 明治 2年 (1869) 版籍奉還 松平忠礼は藩知事に。
- 4年 (1871) 廃藩置県 上田藩は上田県となり、ついで長野県に統合される。上田に東京鎮台第二分営が置かれ、上田城はその管轄下に置かれる。
- 5年 (1872) 旧藩主松平忠礼と弟忠厚の兄弟が私費でアメリカに留学。
- 7年 (1874) 前年の分営廃止に伴い、上田城跡の払い下げが始まる。
- 10年 (1877) 本丸隅櫓2棟が上田遊郭に移築され、貸座敷「金秋楼・萬宝楼」として営業を開始。
- 11年 (1878) 二の丸三十間堀北側に招魂社遷座。【旧市民会館駐車場付近】
- 12年 (1879) 松平神社創立の許可。社地は丸山平八郎氏が寄付した本丸南側。【現在の真田神社】
- 13年 (1880) 本丸北側を松平神社付属の遊園地として保存をとの声をあがる。
- 14年 (1881) 招魂社が本丸北側に移転新築される。
- 16年 (1883) この頃、本丸跡に上田藩校文武学校の建物のうち、文学校(明倫堂)が移築される。
- 18年 (1885) 上田監獄支署が二の丸に完成。【博物館付近】

- 27年 (1894) 本丸に演武場ができる。【南櫓西側付近】二の丸武者溜りに武徳殿ができる。【旧市民会館付近】
- 29年 (1896) この頃、本丸跡が公園としての体裁が整う。
- 40年 (1907) 本丸に移築していた上田藩校明倫堂の建物を料亭として使用を始める。
- 大正 元年 (1912) 小泉曲輪に第一原蚕種製造所ができる。【上田城跡公園園体育館駐車場付近】
- 6年 (1917) 二の丸北側に伝染病院ができる(のち上田市健康センター)。【二の丸北虎口南東側】
- 8年 (1919) 市制施行。
- 12年 (1923) 上田招魂社が二の丸北側に移転。【現在の場所】
上田市公会堂を二の丸に設置。【旧市民会館付近】
- 14年 (1925) 本丸に弓道場ができる。
- 昭和 2年 (1927) 二の丸橋竣工。二の丸堀跡を通る上田温泉電軌北東線が伊勢山まで開通。市営運動場を設置。金箔瓦出土を伝える。小泉橋竣工。
- 3年 (1928) 長野刑務所上田出張所(旧上田監獄支署)が城跡外に移転し、跡地はテニスコートと児童遊園地(4年)に。【博物館・同別館付近】陸上競技場、野球場、相撲場を二の丸百間堀跡に設置。【現在の場所】以上の施設は昭和天皇御成婚記念事業として行われる。
- 4年 (1929) 本丸に唯一残っていた櫓(西櫓)を徴古館として一般公開。
- 7年 (1932) 上田城築城350年祭が挙行される。
- 9年 (1934) 時の鐘が大手の石垣上から二の丸橋北側に移築する。【現在の平和の鐘】
上田城跡(本丸・二の丸)が文部省指定史跡となる。
- 12年 (1937) 武徳殿を二の丸招魂社東側に移転する。
- 13年 (1938) 上田遊郭の金秋楼・萬宝楼が廃業。

- 16年 (1941) 金秋楼・萬宝楼として使用されていた2棟の櫓が売却され、東京の料亭に転売される。
- 17年 (1942) 上田城址保存会結成。2棟の櫓を買い戻し、城跡への移築再建を目指す。
- 18年 (1943) 金秋楼・萬宝楼を移築のため解体。武徳殿を日本陸軍駐屯所に改称する。
- 19年 (1944) 櫓再建工事の上棟式が挙行されるも、太平洋戦争の戦局悪化のため工事中断。
- 20年 (1945) 上田市公会堂を進駐軍のダンスホール(アサマダンスホール)として開放する。
- 23年 (1948) 上田城址保存会再発足。櫓再建工事が再開。日本陸軍駐屯所(旧武徳殿)を上田市屋内体育館とする。
- 24年 (1949) 2棟の櫓(南櫓・北櫓)落成。金秋楼が南櫓、萬宝楼が北櫓として復元される。二の丸に小動物園が復活する。【博物館南側付近】
- 28年 (1953) 3棟の櫓を上田市立博物館として公開。松平神社、真田氏と仙石氏も合祀して上田神社と改称。二の丸に動物園が復活する。熊舎は丸山平八郎氏の寄付による。【旧市民会館駐車場北側】
- 29年 (1954) 二の丸に市営プールができる。【平成26年廃止】
- 33年 (1958) 動物園に青木村で保護されたツキノワグマの仔熊(六ちゃん)が入檻。
- 34年 (1959) 本丸の3棟の櫓が長野県宝に指定される。
- 37年 (1962) 二の丸に山本鼎記念館開設。【平成26年閉館】
- 38年 (1963) 上田神社を真田神社と改称。二の丸に市民会館が完成。【平成26年閉館】二の丸北東の土塁を崩して近接する堀を埋める。【児童遊園地付近】上田市屋内体育館(旧武徳殿)を上田市総合展示館とする。
- 40年 (1965) 二の丸に市立博物館新築。【現在の場所】

- 42年 (1967) 南櫓・北櫓の屋根葺替ほかの修理工事を実施。児童遊園地を二の丸北虎口東側に移転。【現在の場所】
- 46年 (1971) 市営プール東側にちびっこプールができる。【平成26年廃止】
- 47年 (1972) 二の丸堀跡を軌道敷とした上田交通(旧上田温泉電軌)東北線廃止。3櫓の公開を休止。
- 52年 (1977) 「上田城跡環境整備委員会調査研究報告」発行。本丸の料亭が移転。
- 54年 (1979) 本丸で料亭として使われていた明倫堂の建物を取り壊す。
- 56年 (1981) 3棟の櫓の修復工事を開始(62年に完了)。二の丸堀電車軌道敷跡地を利用してけやき並木遊歩道が完成。【現在の場所】二の丸樹木屋敷跡に勤労青少年ホームができる。【平成27年閉館】
- 57年 (1982) 「上田城跡公園整備方針」を策定。
- 58年 (1983) 上田城築城400年祭が挙行される。
- 61年 (1986) 「上田城跡公園整備方針(第二次)」を策定。
- 62年 (1987) 南櫓の公開を再開する。
- 63年 (1988) 上田市総合展示館(旧武徳殿)を解体撤去する。
- 平成 2年 (1990) 上田城跡の発掘調査を開始。二の丸北虎口北側の石垣修復工事を行う。
- 3年 (1991) 「史跡上田城跡整備基本計画」策定。本丸堀の浚せつ工事を行う。本丸東虎口櫓門の復元工事に着手(現場の工事は平成5年から実施)。
- 4年 (1992) 本丸西虎口の遺構地上表示を行う。
- 5年 (1993) 本丸東虎口櫓門の現場工事を開始。二の丸北虎口南側の石垣復元工事、本丸東虎口土橋の石垣及び武者立石段の復元工事を行う。
- 6年 (1994) 本丸東虎口櫓門復元完了。北櫓の公開を再開する。

- 8年 (1996) ニヶ淵崖面崩落防止工事に向けて、西櫓南側のニヶ淵崖面ボーリング調査を実施。
- 12年 (2000) 市民会館南側のニヶ淵崖面ボーリング調査を実施、崖面崩落防止工事に着手。
- 14年 (2002) ニヶ淵南櫓下崖面の石垣解体修復工事に着手(~ 18年)
- 18年 (2006) 大坂の陣での真田信繁(幸村)の活躍を縁に、大阪城と友好城郭提携を結ぶ。
- 22年 (2010) ニヶ淵崖面崩落防止工事(旧市民会館南側崖面に着色モルタル吹付工事)を施工。
- 23年 (2011) 「史跡上田城跡保存管理計画」を策定。併せて「史跡上田城跡整備基本計画」を改訂。
- 24年 (2012) 史跡内園路の舗装工事に着手(~ 27年)
- 26年 (2014) 市民会館・山本鼎記念館が閉館。
- 27年 (2015) 勤労青少年ホーム跡地に観光北駐車場を設置。市営プール跡地に多目的広場を設置。真田神社が社務所の新築移転工事を実施。

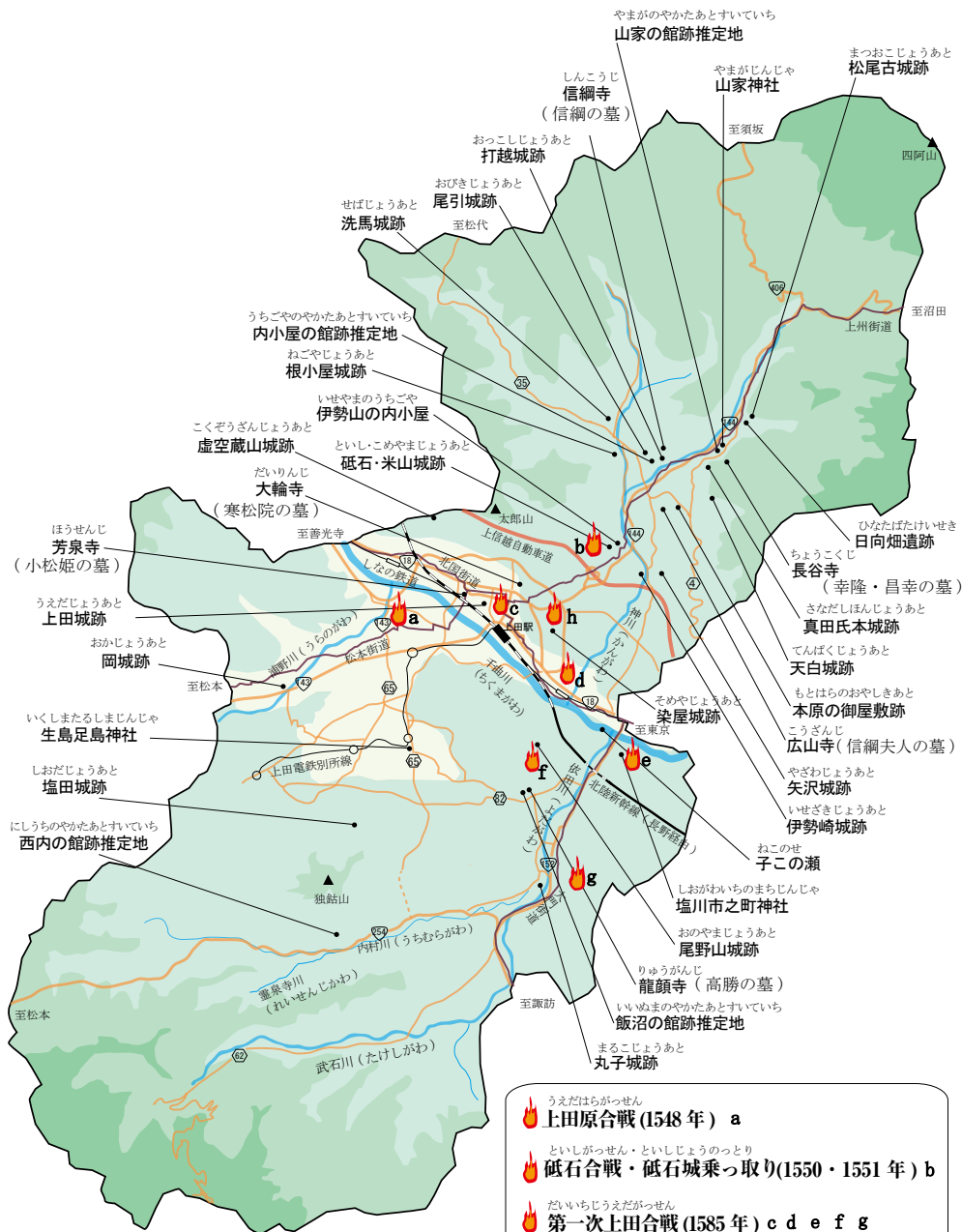






上田城本丸東虎口(南櫓・櫓紋・北櫓)

上田城歴代城主

	城主名		石高	襲封・転封・没年等
きんだ 真田	まさゆき 昌幸	安房守	9万5千石	天正11年(1583)築城 慶長5年(1600)改易・配流
	のぶゆき 信幸 (信之)	伊豆守	〃	慶長5年(1600)入封(襲封) 元和8年(1622)松代へ移封
せんごく 仙石	ただまさ 忠政	兵部大輔	6万石	元和8年(1622)小諸より入封 寛永5年(1628)没
	まさとし 政俊	越前守	〃	寛永5年(1628)襲封 延宝2年(1674)没 寛文9年(1669)弟政勝に矢沢2千石を分知
	まさあきら 政明	越前守	5万8千石	寛文9年(1669)襲封 宝永3年(1706)出石へ移封
まつだいら 松平	ただちか 忠周	伊賀守	5万8千石	宝永3年(1706)出石より入封 享保13年(1728)没
	ただあむ 忠愛	伊賀守	〃	享保13年(1728)襲封 宝暦8年(1758)没 享保15年(1730)弟忠容に塩崎5千石を分知
	ただより 忠順	伊賀守	5万3千石	寛延2年(1749)襲封 天明3年(1783)没
	ただまさ 忠濟	伊賀守	〃	天明3年(1783)襲封 文政11年(1828)没
	たださと 忠学	伊賀守	〃	文化9年(1812)襲封 嘉永4年(1851)没
	ただます 忠優 (忠固)	伊賀守	〃	天保元年(1830)襲封 安政6年(1859)没
	ただなり 忠礼	伊賀守	〃	安政6年(1859)襲封 明治2年(1869)版籍奉還

真田氏ゆかりの史跡分布図



-  うえだはらがっせん
上田原合戦(1548年) a
-  としがっせん・としじょうのつとり
砥石合戦・砥石城乗っ取り(1550・1551年) b
-  だいちじうえだがっせん
第一次上田合戦(1585年) c d e f g
-  だいにじうえだがっせん
第二次上田合戦(1600年) c h